



2017・12

SORA 76号

冬
波

柴
田
佐
知
子

一揆なら加はりさうな案山子かな

粃殻の山に焼きむらありにけり

共喰ひの音も混じれる虫の闇

すぐ眠る母を炬燵に預けおく

雪をんな昼は質屋の蔵に居り

—「俳壇」12月号より—

営々と継ぐ酒蔵や実南天

笛さらふ神官一人むささび飛ぶ

くらがりに神を待たせて神楽笛

枯野より押し出されし岬神

白息を豊かに別れ告げにけり

打ちつくる冬波に崖強くなる

もう恋とちがふシヨールを羽織りけり

荒神は煤にくつろぎ冬の霧

赤子まだ何もかくさず冬ぬくし

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

ゆつくりと振り向く牛や雲の峰

窓越しに夕餉整ひ酔芙蓉

力走の果てのごとくに暑気中り

あるがまま生き長へて小豆飯

仏飯のまだ匂ひぬる今朝の秋

秋涼の星弾き出すピアノ曲

貝割菜小さな光纏ひけり

夕日いま丘のコキアの狼火めく

老人の世話も老人秋の昼

木の実落つ小さな屋根の投句函

山裾を隠す煙や秋暑し

講の人どつと笑へり柿簾

青空を転がしてゐる芋の露

師の筆の夜の字歪む扇子置く

捨て案山子身包み剥がれ火の中に

燈火親し仙台箆筒威を保ち

福岡 柴山志津子

長崎 荒井千佐代

蓑虫の揺るるほかなき入り日かな

髪洗ふまだ洋上にゐる心地

鍬の手を休めて仰ぐ鶴の天

サングラスかけ旅人にまぎれけり

鶏が蹴散らしてゐる落葉かな

潮枯れの棕櫚のそよげる秋はじめ

切れぎれの生命線や日向ぼこ

草の花波止に軍馬の水飲場

まづ犬の首輪を替ふる年用意

食卓の定位置夕焼けの正露丸

口論もそこまできると言ふ厚司かな

次の世は猫になりたし昼寝せり

火の跡をきれいに均す年の暮

こすもすやローカル線は湾に沿ひ

注連飾る錆びたる釘をさぐりつつ

車窓より小さき漁村の秋祭

埼玉 服部 早苗

福岡 岸 洋子

沢音の押しよせてくる青網戸

耐ふることいま暑さのみ終戦日

向日葵や笑ひて伸びる子の背丈

潮風の地を這ふ松や昼の虫

ソフトクリームつかの間を父持たさるる

ゆつくりと雨兆しけり下り梁

姥捨の道はここより山葡萄

虫籠を見せて誰にも触れさせず

赤梨のざらりと口に父恋し

赤とんぼ墓の高さを離れざる

盆提灯のぼしゆくととき骨の音

子の頭ほどの鶏頭逆撫です

愛猫の墓標小さし露葎

包丁の音の小刻み秋立てり

レシートとティッシュの間の秋扇

天高し帽子の癖を直しけり

北九州 深川 淑枝

蓮の葉の衰へをまた風揺する

破れ蓮の風骨凜と水に立つ

水に置く影も老いたる蓮かな

野の風を振り切る高さ秋の蝶

目の端に遠白波や晩稻刈る

農夫老い小さく組みぬ藁の塚

日もすがら藁塚の曳く影吹かる

藁ぼつち夜は星々と共に濡れ

兵庫 戸栗 末廣

海に向き笛吹く秋の雛かな

菊雛とほくの海を眺めをり

潮曇る秋の雛を蔵ふ日は

波音のほかにときをり法師蝉

新涼や川さかのぼる波頭

敦盛の塚より海へ秋の蝉

潮騒の滲みたる障子洗ひをり

奥の間に波音とどく秋の雛

糸島 小林 朱 夏

つくつくし独りの膳を整へし
曼珠沙華母屋の側に納屋と墓
草の穂や弱る仔牛の離されて
時雨るるや母には重き物ばかり
順番に赤子を抱く初座敷

福岡 あさなが捷

洗濯機の底にどんぐりこぼれをり
園児より大きな楽器いわし雲
眼帯の取れ全山の紅葉かな
谷底の霧に入りゆく牛の群
水蹴りて水鳥一羽離れけり

粕屋 秋 千 晴

葛切や天井も戸も網代張り
おはぐろの影を落さず止まりけり
弔辞受くるたびハンカチを握りし
む
山彦に異国語混じり秋澄めり

福岡 角野 良 生

秋日和ひよこの小屋を作りをり
磯桶も海女三代の色にして
身拵へほどには鮎の釣れてみず
戻れざるほどは流れず水馬
揚花火一息ありてひらきけり

岡垣 田中とし江

不老水金魚の分も汲むとせむ
畦道の真ん中糸のころ草通り
早稲の香や肺の中まで日本人
鼻先のざらりと優し祭馬
子が握るものくたくたと浦祭

糸田 宮井知英

送り出て秋の夜風と思ひけり
思ひ切り鳴いて鴉の別れかな
海に向く洞の暗闇鷹渡る
もう羽織袴脱ぎたき七五三
踏み入れば魔界なりけり芒原

福岡 田代貞香

草の穂や背中の赤子揺すり上ぐ
満月の墜ちさう独り住む家に
でで虫のつく野の花をもらひけり
人住まぬ里の山椒種飛ばす
緩やかに一人に慣れて柿を干す

福岡 山内碧

ぐづる孫に祖母のまじなひ赤まんま
雪溪を巻き込み川の轟けり
草ひばり山を離れぬ朝の雲
はにかみの色に出でたる新生姜
仕込み終へ酒蔵白く夜へ入る

福岡 栗原京子

夜の守宮はさみし箸の震へけり

頭に幣の触るるがうれし夏祭

運動場の真中に祭櫓かな

滝行者水の勢によるめけり

抱かれゐる稚児の衣だらり渡御の道

千葉 原友子

夜習の空腹に勝つ飴一個

法螺貝の聞こえてきさう芒原

茸飯よりも気に入り曲げ輪つば

木の実降る何も無き日の音楽室

瑠璃に透くピアノ調律桐一葉

宮崎 田代民子

むちやくちやにしてまぐなぎの柱

なす

齡にはあらぬ死の順つくつくし

はらからの一人欠けたる草の花

後の世の月見酒にと酒そそぐ

長崎 松尾龍之介

花の香に埋もる愁思の柩閉づ

弟の遠ざかりゆく秋の風

睡蓮や池の深まるひとところ

その影を青嶺に預け雲育つ

夏休み列島赤き世界地図

福岡 永淵 恵子

蝙蝠や定員割れの草野球

河童忌や純金で接ぐ茶器のひび

原爆忌水を大事に使ひけり

余所者もリュックを揺らし踊りけり

台風一過太公望がまた一人

須恵 苑 実 耶

秋風やもう野を駆けぬ馬ばかり

時々は蓑虫の糸弾きやる

秋日和まづ棟梁が餅をまき

伸びをして外に行く猫葉鶏頭

夫とうに眠りにつきし桃をむく

大阪 田岡 千章

その昔ここに窯あり花芒

秋夕焼鎌鋏手足洗ひけり

日焼の子歩くかたちに靴脱げり

片蔭へ半身を反りて陶狸

土用風吾が影足にまとひつく

北九州 河原 敬子

結論は後日申さむ法師蟬鬼灯の熟

るる誰にも愛されず

天高し巨船のごとき競技場

漁師町の結ひの力よ在祭

浜風や踊りて飲みてまた踊り